

イザヤの『ぶどう畑の歌』とその歴史的状況

—イザヤ書5章の釈義的考察—

大 島 力

イザヤの「ぶどう畑の歌」は新約聖書にも影響を与えている優れた詩文である（マルコ12：1-12、及び並行箇所）。また、イザヤ書内においても、その反響を見出すことができる（27：2-6）。しかし、その「ぶどう畑の歌」の背後にある紀元前8世紀のエルサレムの歴史的状況を踏まえることなくその内容と使信を正確には理解できないであろう。そこで以下の論考においては、まず現在のイザヤ書5章の文学的構造を明らかにすることによって、イザヤの活動の初期において「ぶどう畑の歌」がいかなる意味を有していたかを明らかにし、さらにそれに続くイザヤ書の構成の中でイザヤ書5章がどのような構成的機能を果たしているかについて考察を加える。

I. イザヤ書5章1-7節注解

<翻訳>

- 1 わたしは歌おう、わたしの親愛なる友のために。

彼のぶどう畑について、わたしの愛の歌を。

わたしの親愛なる友は肥沃な丘に、ぶどう畑を持っていた。

- 2 彼はそこを掘り起こし、その石を取り除き、良いぶどうを植えた。

またその中央に見張りの塔を築き、そこに搾り場も掘った。

彼は良いぶどうが実るのを待ち望んだ。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。

- 3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ
わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
- 4 わたしがぶどう畑に対してなすべきことで、わたしがしなかったことが
まだあるのか。
わたしは良いぶどうが実るのを待ち望んだのに、どうして酸っぱいぶど
うが実ったのか。
- 5 さあ今、わたしはあなたがたに、わたしのぶどう畑にしようとしている
ことを知せる。
その垣根を取り除き、荒らされるにまかせ、その石垣を壊し、踏みつけ
られるにまかせる。
- 6 わたしはこれを荒廢の地とする。枝は刈り込まれず、雑草は抜かれず、
茨とあざみが生い茂る。
わたしは雲に命じて、もはやそこに雨を降らせない。
- 7 まさに万軍のヤハウエのぶどう畑は、イスラエルの家である。
ユダの人は、彼が喜んで植えたもの。
ヤハウエは公正（ミシュパート）を待ち望んだのに、見よ、流血（ミス
パーハ）。
- 正義（ツェダカー）を待ち望んだのに、見よ、叫喚（ツェアカー）。

<形態/構造/背景>

この部分は極めて周到なテキスト構成をなしており、しかも「ぶどう畑」というメタファーを有効に用い、ヤハウエのイスラエルの民への厳しい審判を効果的に語り出している。

また、文章は明瞭な集中構造をなしている。

1節aは「恋愛歌」を思わせる語り出しである。「ぶどう畑」しばしば、女性や恋愛の場を象徴的に示す（雅歌1：5、7：13等）。しかし、それはいわば「失恋」に終わり、7節では「万軍のヤハウエのぶどう畑」はイスラエルの家であることが明かされ、「公正」や「正義」ではなく、「流血」と「叫喚」のみであ

ることが叫ばれている。従って1節aと7節は、この「ぶどう畑の歌」の外枠である。(A-A')

1節b-2節には、ぶどう畑の所有者が、ぶどう畑に対して最大限の配慮をなし、「良いぶどう」を植え、「良いぶどう」が実るのを待ったが、「酸っぱいぶどう」であった失望が言い表されている。(B)。

3節冒頭では、その状況に対して、ぶどう畑の所有者=ヤハウェは、エルサレムの住民とユダの人に呼びかけ、裁きを訴える。その冒頭の句は「さあ」(アッター)である。続いて5節冒頭においても「さあ」(アッター)という語が使われ、ヤハウェがそのぶどう畑に対してなそうとしていることを告げている。この二つの部分是对应している。(C-C')

5節b-6節では、1節b-2節とは全く逆に「ぶどう畑」が踏みつけられ、荒廃し、そこには雨も降らない、ということが告げられている。これは対照的内容として対応している。(B-B')。

以上のような集中構造の中央に4節がある。これはぶどう園の所有者=ヤハウェが最も訴えたいことである。従って、この「ぶどう畑の歌」にはまだ最終的審判は下っておらず、決定的終結は記されていない。下記に、以上の集中構造を図示する。

1節a	A 愛の歌をうたう
1節b-2節	B 「掘り起こし、その石を取り除き」
3節	C 「さあ」
4節	D <わたしがぶどう畑に、しなかったことがあったか>
5節a	C' 「さあ」
5節b-6節	B' 「垣根を取り除き・・・石垣を壊し」
7節	A' 流血と叫喚

この「ぶどう畑の歌」が紀元前8世紀のイザヤに由来することは間違いないであろう。また、エルサレムとユダのみならず北王国を含む「イスラエルの

家」全体が断罪されているので、民の中の諸グループをそのつど挙げて告発している「災いの言葉」(5:8-23)よりも後の時代の考察が反映している⁽¹⁾。しかし、外部からの敵の脅威に関する言及はないので、イザヤの活動の初期に位置づけられると考える。

<注解>

1 節a

「親愛なる友」という語は、端的に「わたしの友」と訳すことができる⁽²⁾。「親愛なる友」と訳したヤディードという語は、旧約聖書において殆どの場合「神に愛される者」という意味で用いられているが(申33:12、エレ11:15、詩60:7、108:7、127:2)、しかし、ここでは文脈上(文章構成上)、「親愛なる友」とはヤハウェのことを指し、預言者イザヤとヤハウェとが親密な関係にあることが強調されている。すなわち、預言者はヤハウェを「わたしの友」(あるいは「わたしの愛する者」と呼び得たのである。そして「ぶどう畑」に譬えられるイスラエルの民とヤハウェの関係について語り出すのである。

1 節b－2 節

ここから物語風の語りが始まる。「わたしの親愛なる友は肥沃な丘に、ぶどう畑を持っていた」。それに続く「掘り起こす」「石を取り除く」「植える」「(見張りの塔を)築く」「(搾り場を)掘る」という5つの動詞は、ぶどう畑の所有者の熱心さと労苦を端的に示している。とりわけ「見張りの塔」は、収穫の時に一時的に建てられる「仮小屋」(1:8)とは異なり、ぶどう畑を長期間(新たな植樹から収穫までの数年間)守るためのものである⁽³⁾。しかし、実ったのは「良いぶどう」ではなく「酸っぱいぶどう」であった。この失望感は大い。「待ち望んだ」(カーワー)にも関わらず、それに応えない「ぶどう畑」への落胆は、この2節を受けて、4節、そして7節に、同じ語を用いて繰り返されている。

3－4 節

ここで突然、語り手が交代している。「エルサレムに住む人よ、ユダの人よ」と語りかけているのは「ぶどう畑」の所有者である。そして、1－2 節の言葉を聞いていた彼らがこの物語に巻きこまれ、「ぶどう畑」とその所有者の間を裁くように求められている。また、その求めは、この部分を読んでいるイザヤ書の読者に対してもなされていると言えよう。「わたしがぶどう畑に対してなすべきことで、わたしがしなかったことがまだあるのか」。この問いかけは、2 節に基づいている。当然ながら、「ぶどう畑」の所有者は考えられる限りの配慮をなしており、問われるべきは「ぶどう畑」の側である。従って、「良いぶどう」を実らせず、「酸っぱいぶどう」実らせてしまった「ぶどう畑」への嘆きは正当あることを、「エルサレムに住む人」と「ユダの人」は認めざるを得ない。

5－6 節

「ぶどう畑」の所有者は、その問題を4 節で告発しているが、それだけでなく、「ぶどう畑」に裁きを下そうとしている。それを「エルサレムに住む人」と「ユダの人」に知らせている（3：14を参照）。その内容は、2 節の「ぶどう畑」への配慮とは正反対の行為である。「その垣根を取り除き、荒らされるにまかせ、その石垣を壊し、踏みつけられるにまかせる」。特に「その垣根を取り除き・・・その石垣を壊し」は、2 節の「そこを掘り起こし、その石を取り除き」と対照的な行為である。

また、「ぶどう畑」を「荒廃の地」とし、「茨とあざみが生い茂る」と語る。「茨とあざみ」は荒廃の象徴である（34：13、他）。さらにこれまで「ぶどう畑」の所有者として描かれてきた「わたし」は「雲に命じて、もはやそこに雨を降らせない」と語る。旧約聖書において、地に雨を降らせるのはヤハウェである（申命11：14、サム上17章以下のエリヤ物語他を参照）。従って、「ぶどう畑」の所有者のイメージとしては、破格な叙述である。

7 節

ここで初めて、ぶどう園の所有者とは「万軍のヤハウェ」であり、ぶどう園は「イスラエルの家」、またヤハウェが喜んで植えたものは「ユダの人」であることが明かされる。しかし、このことを、特に6節の内容から「エルサレムに住む人」「ユダの人」(3節)は既に察していたと考えられる。イザヤはそのことを前提とし、効果的にイスラエルの民の現実を厳しく批判している。すなわち、ヤハウェが裁こうとしている「ぶどう畑」とはまさに、この物語を聞いている当人たちのことであると告げたのである。

「イスラエルの家」と「ユダの人」という語が続けて用いられている。イスラエルという名称はとりわけ北王国を指す場合と(9:7)、神の民全体(北王国と南王国)を指し示す場合がある(8:14)。この場合は後者であり、神の民(「イスラエルの家」)全体が預言者の批判の対象となっていると考えられる。そして、特にエルサレムを中心とする「ユダの人」(南王国)が「(ヤハウェが)喜んで植えたもの」として批判対象となっている。

また、その批判の内容は語呂合わせとなっている。ミシュパート(公正)と音が似ているミスパーハは、旧約聖書にここにだけ使われている語である。意味は不明なところがあるが、通常「流血」と訳されている(Williamsonは「流し出す」(サーパハ)という語に由来すると推測する)⁽⁴⁾。またツェダカー(正義)は叫喚(ツェアカー)と音が似ている。このような詩的技巧をもって、ヤハウェは公平と正義を「待ち望んだ」(カーワー)のに、それとは全く逆の悲惨な現実と叫びがあることが、印象的に語られている。

<解説・考察>

K.Nielsenは、“There is Hope for a Tree”という優れた書物において、特に旧約聖書の預言者のイメージあるいはメタファーには、情報を分かりやすく伝えるinformative functionと、その聞き手と読み手を巻き込み、現実の世界についての新しい認識へと招き、またこれまでとは違った行動を促す、すなわち聞き手に変化をもたらすperformative functionをもっていることを明らかにし

ている⁽⁵⁾。この観点から言うと、「恋愛歌」のように始まったこの「ぶどう畑の歌」が「失恋」に至ったことに引き込まれ、そこで、その聞き手である「エルサレムに住む人」と「ユダの人」が突然その物語の中に引き入れられる展開(5:3)は、まさにperformativeな語りであると言える。彼らは最初、傍観者的に聞いていた「酸っぱいぶどう」を実らせた「ぶどう畑」とは、他ならない自分たちであることを知るのである。そしてヤハウエの厳しい現実批判に反論できず、変化を求められる。ヤハウエは三回「待ち望む」(2節、4節、7節)が、しかしその民は応えていないのである。

このヤハウエの現実批判(裁き)は、具体的には3:14に記されているような、エルサレムの指導者層が、「貧しい者」から搾取している現実に向けられている。しかし、この「ぶどう畑の歌」では、その批判の対象が「神の民」全体に拡大され、かつ徹底されていると言えよう。

他方、このイメージが豊かなメタファーは、新しいテキストを生み出していく影響力をもっている。後代の黙示的テキストである27:2-6は、明らかにこの部分を前提とし、「(もはや)わたしは憤らない。茨とあざみがわたしと戦おうとするなら、わたしは進み出てそれをまとめて焼き払う」(4節)と「ぶどう畑」の回復を告げている。また、新約聖書(マコ12:1-12等)においては、ぶどう園の主人(神)が神の民によって拒絶される物語として展開され、主人の息子(イエス)も捕らえられて殺され、ぶどう園の外に放り出される、と物語られている。預言者イザヤはその物語の原型となるテキストを形成し、ヤハウエの厳しい裁きを告げているが、しかし、その後の神の民の姿については沈黙をしている。

Ⅱ. イザヤ書5章8－30節注解

<翻訳>

8 災いだ、家に家を連ねる者らは。彼らは畑に畑を増し加える。

もはや余地はなくなり、あなたがただけで、この地のなかに住もうと

している。

- 9 わたしの耳に万軍のヤハウェは告げる。＊
まさしく多くの家は廃墟となり、大きく美しい家々には住む人もいなくなる。
- 10 まさに十ツエメドのぶどう畑は、一バトの収穫しか生み出さず、
一ホメル種は、一エファの実りしか生み出さない、と。
- 11 災いだ、朝早く起き、濃い酒を求め、
夜遅くまで、ぶどう酒に身を焼く者たちは。
- 12 彼らの酒宴には、琴と豎琴、タンバリンと笛、そしてぶどう酒がある。
彼らはヤハウェの働きを顧みず、その手の業を見ようとしない。
- 13 それゆえ、わたしの民は、無知のために捕え移される。
その貴族たちは飢えに瀕し、その民衆は渇きで干上がる
- 14 それゆえ、陰府はその喉を広く開き、その口を限りなく大きく開ける。
高貴な者も民衆も、そのざわめきも歓声も、そこに落ちていく。＊
- 15 人間は卑しくされ、人は低くされる。高慢な者の目は低くされる。
- 16 万軍のヤハウェは公正によって高くされ、聖なる神は正義によって自ら聖であることを示す。
- 17 小羊はその牧場にいるように草を食べ、肥えた獣は廃墟の中に餌を得る。
- 18 災いだ、むなしい手綱をもって咎を引き寄せ、車の綱のように罪を引き寄せる者は。
- 19 彼らは言う、「彼を急がせよ、その業を早く起こさせよ、我々が見ることができるよう。
イスラエルの聖なる方の計画を近づけ、実行させよ、そうしたら我々は認めよう」と。
- 20 災いだ、悪を善と言い、善を悪と言う者たちは。
彼らは、闇を光とし、光を闇とする。
苦いものを甘くし、甘いものを苦くする。
- 21 災いだ、自らを知恵ある者とみなし、自分では理解があると考える者た

ちは。

- 22 災いだ、ぶどう酒を飲むことでは勇者、強い酒を混ぜて飲むことにかけては
豪快な者たちは。

23 彼らは賄賂のゆえに悪しき人を無罪とし、正しき者たちの正義を遠ざける。

24 それゆえ、火の舌が切り株を焼きつくし、炎の中で枯れ草が燃えてなくなるように、

彼らの根は腐り、彼らの花は、塵のように姿を消す。

なぜなら、彼らが万軍のヤハウエの教えを拒絶し、イスラエルの聖なる方の言葉を軽蔑したからである。

25 それゆえ、ヤハウエはその民に対して怒りを発し、その民に手を伸ばし、打たれた。

山々は震え、彼らの死体は通りの真ん中に、芥のように横たわっている。

それでもなお、その怒りは止まず、いまだにその手は伸ばされている。

26 ヤハウエが、遠くの国々に対して旗を掲げ、地の果てから来るようにそれに合図をする。

すると見よ、*それは速やかに急いでやって来る。

27 その中に、疲れる者はなく、よろめく者もない。まどろまず、眠らず、その腰の帯は解かれず、その履物の紐も切れない。

28 その矢は鋭く研がれ、その弓はすべて張られ、

その馬のひずめは火打ち石ように、その車輪はつむじ風のように思える。

29 その叫び声は獅子のようで、若獅子のようにほえる。

うなり声をあげ、獲物をつかむ。救おうとしても、助ける出せる者はいない。

30 その日には、*ヤハウエはそれに対して海鳴りのようにうなり声をあげる。

*ヤハウエは地を見る。すると見よ、闇と苦悩のみで、光は雲に閉ざされ闇となる。

(注)

9* マソラは「私の耳において」という語のみ。

14* 「そこに」は陰府を意味する。原文にはないが意味を明確にするために補足する。

26* 「それ」は、マソラでは「彼」。30節の「それ」も同様。おそらくアッシリアを暗示している（10：5等。なお、7：18も参照）

30* 「ヤハウエ」（2回）は、マソラでは三人称単数男性形動詞の主語である「彼」。

<形態/構造/背景>

この部分は大きく二つの部分に分けられる（8－24節、25－30節）。但し、30節は後の8章22節と類似しており、6章1節－8章18節（所謂「イザヤの回顧録」）という大きな単元を囲い込む構造の結び目となっている（Berges, Bueken、後述の図表を参照）。

8－24節には、6回「ホーイ」（災いだ）という言葉で始まる文章が繰り返されている。それらは先行する「ぶどう畑の歌」が告発している事柄を多様な形の例示している。支配層による土地の独占と不正（8－10節A、23節A'）、指導者たちが酒宴に溺れ、ヤハウエの働きと業を無視する姿（11－12節B、22節B'）、ヤハウエの支配（業、計画）への懐疑と、自己への過信（18－19節C、21節C'）、事実の曲解と倒錯（20節D）である。これらは、一見単なる例示のように見えるが、その中心はDにあると思われる（20節「災いだ、悪を善と言い、善を悪という者たちは」）。このA B C D C' B' A'という集中構造は明瞭とは言えない点があるが、認められると考える（詳しくはAndrew H. Bartelt, *The Book around Immanuel*, 1996, p.101ff.を参照）⁽⁶⁾。Barteltは、7番目の「災い」という告知は、5：8-25と9：7-10：4を関連付けるために、5：23から10：1に移されたと言う。事実、5：23の内容と10：1-4の内容は類似している⁽⁷⁾。またBerges も基本的にはBarteltの見解に従い、5：8-24に集中構造があるとしている⁽⁸⁾。

他方、25-29節はそれらの事実に基づいて、ヤハウェからの判決を告げている。とりわけ、25節は「それゆえ」(アルケーン)という言葉ではじまり、ヤハウェのその民への怒りが発せられている。その際に、「それでもなお、その怒りは止まらず、いまだにその手は伸ばされている」という、後に「イザヤの回顧録」以降、4回繰り返し替えられされる句が記されている(9:11、16、20、10:4)。

<イザヤ書5章～10章4節の構成>

プロローグ 5:1-8 「ぶどう畑の歌」

災いの告知	5:8-24	A
神の手はいまだに伸ばされている	5:25-29	B
闇と苦悩	5:30	C
「イザヤの回顧録」	6:1-8:18	D
(後の書き継ぎ)	(8:19-21)	
闇と苦悩	8:22	C
(後の書き継ぎ)?	(8:23-9:6)	
神の手はいまだに伸ばされている	9:7-20	B
災いの告知	10:1-4	A

以上の基本構造は明白であると思われるが、8:19-21、また重要な8:23-9:6に関しては、後述する。なお、10:4には「神の手はいまだに伸ばされている」というBのリフレインが、最後にもう一度繰り返し替えされている。

<注解>

8-10節、23節

元来「ホーイ」(災いだ)という言葉は、死者を嘆く詞である。しかし、預言者はそれを現存している指導者に対して発している。すなわち、以下の一連の言葉は、指導者たちの誤りを厳しく批判する預言者の告発である。

王国時代になるとユダ/イスラエルは経済的に発展した。しかし、その一方で貧富の格差が広がり、富める者が家や畑、また土地を占有する状況となっていた。それに対して、預言者はヤハウェの裁きの言葉を告げている。「多くの家は廃墟となり」、大きく立派な邸宅も空き家となるというのである（9節）。このことは、確かに指導者たちによる経済的独占への批判である。しかし、土地は「ナハラー」（相続、嗣業）と呼ばれ、ヤハウェからの賜物であり、少数者の支配に委ねられるべきではないというイスラエルの信仰告白への挑戦であるとも言える⁽⁹⁾。エリヤ物語に記されている「ナボトのぶどう畑」の話を想起させる。ナボトはアハブ王に対して、嗣業の土地（ナハラー）を譲ることを拒否しようとした（列王上21章）。23節も「災いだ」という語はないが、権力者の不正への批判である。

10節では、5章1－7節を受けて「ぶどう畑」が取り上げられ、人口減少により（9節）その収穫は僅となることが告げられている。有用な農地が収穫による益を生み出さないことは農業の全面的崩壊を具体的に示している（10節）。

11－12節、22節

二回目の「災い」の告知である。ここでの「濃い酒」を飲むことへの批判は、遊牧時代の理想や「ナジル人」に関わる規定（民数6：2-3等）ではなく、知恵の伝統に根ざしており（箴20：1）、酒宴での泥酔への戒めである。それは「ヤハウェの働き（ボーアル）」と「その手の業（マアセー）」を見えなくするのである。この「業」（マアセー）という語は19節にも使われている。G.フォンラートは、この「働き」と「業」という語は、イザヤによって初めて神の歴史支配を示す言葉として用いられたとしている。そして、その語はイザヤに特徴的な「（イスラエルの聖なる方の）計画（エーツァー）」という表現と並行して用いられている⁽¹¹⁾。

22節の五回目の「災い」の告知も、知恵の伝統に根差した、酒宴での泥酔への批判である。

13-17節

13節と14節冒頭に「それゆえ」という語が繰り返され、ヤハウェの「働き」と「業」を顧みない結果生ずる事態が叙述されている。「わたしの民」という表現は、裁きに関してヤハウェと預言者とが深く結びついていることを示している(3:12, 14, 10:2, 24)。そして、その裁きは「貴族たち」「民衆」を問わず下される。具体的には「飢え」と「渇き」である。14節ではそれが「陰府」に落ちていくことであると神秘的表現されている。15-16節は2章9節そして11節を想起させる。「人間は卑しくされ、人は低くされる」(5:15)は2章9節aと全く同じである。それに対してヤハウェは高くされるのであるが(2:11)、5章14節の場合、「公正」(ミッシュパート)と「正義」(ツェダカー)という語が用いられ、「ぶどう畑の歌」(特に5:7)との関係性が示されている。「万軍のヤハウェは公正(ミッシュパート)によって高くされ、聖なる神は正義(ツェダカー)によって自ら聖であることを示す」。イザヤ的な表現であると言える。17節は13節に帰り、捕らえ移された後の町と状況を描いている。

18-19節、21節

三回目の「災い」の告知である。ここでは12節とは対照的に「その(ヤハウェの)「業」(マアセー)を早く起こさせよ、我々が見ることができるよう」と言われている。しかし、これは不信仰者への皮肉である。事実ここで「災い」を告げられているのは「咎」と「罪」を引き寄せている者なのだから。また、「ヤハウェの業」は「イスラエルの聖なる方の計画(エーツァー)」と言い換えられている。この「計画」(エーツァー)という語(動詞形ヤーアツも含める)は王国の宮廷政治における政策決定を示す用語である(列王上12:6-7, サム下15:7-18:23を参照)。その政策決定のための用語をイザヤは神学化し、「ヤハウェの計画」またはそれに逆らう「人間の計画」に意味で用いている(7:5, 8:10, 9:5, 14:26, 28:29, 29:15, 30:1)。(この点については以下の論文を参照。大島力「第1 イザヤにおける神の計画」)⁽¹²⁾。

また、21節の五回目の「災い」の告知も、自らの知恵に頼る者たちへの批判

である。

20節

四回目の「災い」の告知である。ここではとりわけ知恵の言葉を用いて、これまでの3回にわたる「災い」の告知をまとめると同時に、「災いの告知」(5:8-24) 全体の中心になっていると言えよう。預言者においては、善は正義と固く結びついており、また悪は正義を否定することである。それゆえ、善と悪を取り違えることはあらゆる秩序の崩壊を招くことになる。それは倫理的秩序のみならず、救いと裁きという宗教的問題に深く関わっている⁽¹³⁾。善と悪、光と闇、甘いと苦い、という対比はそのことを極めてよく言い表している。イザヤと関係の深いアモスも「公正を苦よもぎに変え、正義を地に投げ捨てる者よ」(5:7) と裁きの言葉を語っている

24節

一連の「災い」の告知の結びは、神の裁きが「切り株」「枯れ枝」「根」「花」という植物の比喩をもって描かれている。その裁きはすべてのものが消滅するほど徹底している。その理由は、エルサレムの指導者たちがヤハウェの「教え」と「言葉」に聞かず拒否したからであるとされている。

25-29節

「それゆえ」(アルケーン)という語に導かれて、これまでの「災いの告知」が神の裁きとしてすでに実行されていることを述べている。「怒りを発する」「手を伸ばす」という言葉は、ヤハウェの罪に対する対応を示している。「手を伸ばす」という言葉はイザヤ書以外においても多く用いられている(出エ7:5、エレ6:12、エゼ6:14、等)。その結果は、都市部(おそらくエルサレム)の凄惨なものである。しかし、「それでもなお、その怒りは止まず、いまだにその手は伸ばされている」と記されている。この句は、これ以降、9:11, 16, 20, 10:4において繰り返され、5章から10章にかけての文章構成を形成す

る機能を果たしている（前述のBとB）。

そのさらなる神の裁きの内容は、他の諸国民による脅威である（「遠くの国々」「地の果てから」26節）。預言者イザヤの時代においては、それは具体的にはアッシリアであったと考えられる（10：5を参照）。しかし、ここでは具体名は挙げられていない。それゆえ、後のイザヤ書の読者にとってはバビロンあるいはイスラエルに敵対する後の時代の勢力でもあり得る⁽¹⁴⁾。その勢いは激しく、留まることを知らない。最後にその外敵は「うなり声をあげ、獲物をつかむ。救おうとしても、助け出せる者はいない」（29節）と記されている。

30節

「その日には」で始まるこの節は、25－29節には属さず、独自の展開を示している。

今度は、イスラエルを脅かすのは外敵ではなく、ヤハウエ自身が外敵に対して「海鳴りのようにうなり声をあげ」る。そして、地上を見ると「闇と苦悩のみ」。これは最後の「光は雲に閉ざされ闇となる」という句と相まって、神による裁きの終末論的展開であると言える。

これに対応しているのは8：22節の「地を見渡すと、見よ、苦悩と闇、苦しみ満ちた暗黒、そして追放の暗闇」である。この6：30と8：22は、「闇というテーマ」で一対をなしており、前掲の5章から10章に至る文章構造の「結び目」となっている⁽¹⁵⁾。

<解説・考察>

六回の「災いの告知」は、基本的に、先行する「ぶどう園の譬え」の結びの具体的展開である。「公正ではなく流血」「正義ではなく叫喚」（5：7）がエルサレムとユダに満ちていた。それは富める者による横暴、指導者の墮落と無知、ヤハウエの支配への懐疑と自己過信、事実の歪曲と倒錯であった。その中で幾度か繰り返し批判されているのは、「ヤハウエの働き」「ヤハウエの業」（12、19節）「ヤハウエの計画」（19節）を無視し、侮蔑する高慢さである。とりわけ「ヤ

ハウエの計画（エーツァー）」は、預言者イザヤにとって最重要の事柄であった。イザヤ書の他の箇所での言及も多く（14：24-27、28：23-29等）、ヤハウエの歴史支配を意味している。また、その神の支配との対比で「人間の計画」が批判されている箇所も預言者イザヤに由来すると考えられる。「災いだ、計画（エーツァー）をヤハウエに深く隠す者らは」（29：15）はこの箇所に最も近い（7：5、30：1も参照）。すなわち、イザヤは人間が自らの知恵に基づく計画によって行動することを鋭く批判し、神の歴史支配に常に目を留めるように訴えているのである。同じことは21節にも言いあらわされている（「災いだ、自らを知恵ある者とみなし、自分では理解があると考える者たちは」）。

他方、「災いの告知」の中心には、事実の歪曲と倒錯した考え方への批判がある。20節で「災いだ、悪を善と言ひ、善を悪と言う者たちは。彼らは、闇を光とし、光を闇とする」と言われている。そのような姿勢と態度がまさに混乱と深い闇をもたらすのである。それゆえ後半（25-30節）は、ヤハウエの裁きによってエルサレムの町に凄惨な現実がもたらされることを語っているが（25節a）、それだけでは終わらずに、ヤハウエは諸外国によって脅威をもたらすと告げられている（26節b-29節）。その現実はさらに深い闇である。そして「ヤハウエは地を見る。すると見よ、闇と苦悩のみで、光は雲に閉ざされ闇となる」（30節）と結ばれている。この箇所はイザヤ書の中で最も闇の支配の強さを語っていると指摘されている⁽¹⁶⁾。この深い闇の中に果たして光は射すのであろうか（5：30と対をなしている8：22以下を参照）。

注

- (1) W.A.M.Beuken, *Jesaja*, HTKA, 2003, S.135.
- (2) J.Blenkinsopp, *Isaiah* 1-39, The Anchor Bible, Volume 19, 2000, p.205.
- (3) H.G.M.Williamson, *Isaiah* 1-5, The International Critical Commentary, 2006, p.337.
- (4) Williamson, *ibid.*, p.324.
- (5) K.Nielsen, *There is Hope for a Tree*, JSOTS 65, 1987.
- (6) Andrew H.Bartelt, *The Book around Immanuel*, 1996, p.101ff.
- (7) Bartelt, *ibid.*, p.101-102.
- (8) U.Berges, *Das Buch Jesaja Komposition und, Endgestalt*, 1998, S.89.

- (9) H.Wildberger, *Jesaja 1-12, BK X/1*, 1980. S.184.
- (10) Beuken, *ibid.*, S.149.
- (11) G. フォン・ラート『旧約聖書神学Ⅱ イスラエルの預言者的伝承の神学』, 215-216 頁、荒井章三訳、1982年。
- (12) 大島力、「第1 イザヤにおける神の計画」『神学』45号、1983年。
- (13) Wildberger, *ibid.* S.195.
- (14) Beuken, *ibid.*, 155.
- (15) Berges, *ibid.*, S.88, 93-94. Beuken, *ibid.*, S.156.
- (16) Beuken, *ibid.*, S.157.